

高橋正先生の人と学問

日 暮 高 則

ご病気になられた高橋正先生から、自分が受け持っている国際関係論の講義を2003年春から引き受けてもらえないかという依頼を受けたとき、先生のご病気を心配しながらも、不謹慎にも、なんと恵まれた機会に遭遇できたことか、私は本当に幸せ者だと心底思いました。

国際関係論は、私が大学で学んできたことであり、しかもそれをベースに30年間、通信社の記者として生業（なりわい）のネタとしてきた分野です。国際報道をする中でこれまで多くの経験を積み、思うこと、感じたこと、考えたことは数限りなくありますが、それらを今、次世代の人間に伝えられるチャンスを与えられたことは、まさに金には代えられない喜びと感じたからです。

国際関係論を教えるに当たり、改めて先生のご著書を読み直しました。学生にどう教えていくかのヒントを得たいがためです。そこで、「世界現代史入門」（サイマル出版会刊）を手にとると、先生はある章の冒頭に、「国と国との間には友情など存在しない。あるのは利害関係のみである」というエドワード・グレー（20世紀初頭のイギリス外相）の言葉を引用されているのを見つけました。非常に冷めていてやるせない言葉ですが、これはまさに国と国との関係を的確に表した、現在にも通じる言葉であり、先生の慧眼に改めて驚かされた次第です。

私は記者時代、国際関係を理解するには、まず当該国の国力、すなわち政治、経済、軍事の力がどうなっているのかを徹底的に知るべきであり、国同士の関係は所詮、その国力の延長線上にしかないはずと思ってきました。それは、大学の卒業前に東南アジア諸国をブラブラし、改めて日本、日本人を意識し、相対的にわが国を見ることになったのがきっかけです。われわれは学生時代に、社会主義インター

ナショナルの洗礼を受けた世代ですが、この旅行で個人は国とかかわりなく生きていけないと感じ、同時に祖国日本がどういう国かということ強く意識したのです。

ですから、今、国際関係論を教える中で、学生には国家、つまり祖国日本についてもっと考えてほしいと強調しています。韓国や台湾に生まれれば、君らと同世代人は徴兵に行かされる、米国に生まれていれば、いまごろイラクに行っているかもしれない。中国では、大学の構内で10人が集まってヒソヒソ話をしていると、私服の警察官が飛んできて解散させられるだろう。北朝鮮だったらもっと悲惨であることは容易に理解できるはずです。

こうした国に比べ、空調の利いた部屋で今、何不自由なく勉強できる幸せを感じてほしい。それは、日本に生まれたからで、個人は国家とのかかわりなく生きていけないし、国家の有り様がものすごく個人に影響していることを分かってほしいと口をすっぱくして言っています。

国家が基本ですから、自国の繁栄が第一であり、外国との関係は自国の繁栄にどう役立つかという判断の上に成り立つものです。グレーの言うように、国家関係は冷厳なものであり、いかなる幻想も抱いてはいけません。日本にとって、米国は軍事同盟を結んでいる第一級の友好国ですが、それでも貿易摩擦が起これば非情な要求を突きつけるし、著作権保護では厳しく迫ってくるし、自国の経済活動にマイナスになると分かれば、平気で同盟国に攻撃を仕掛けてくる国でもあります。

日本を取り巻く東アジア諸国についても、憲法にあるような「平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して」などという悠長な気分させられる相手でないことは明らかでしょう。あくまで敵性国家に囲まれているのだと認識し、その上で日本とこれらの関係をどう構築していくのかを考えるべきです。日本に限らず一般的に国際関係を見る場合、一つひとつの国家に国益があり、その獲得に向けて動いているのだという観点を忘れないでほしいと学生には話しています。

03年に、東京財団の研究プロジェクトチームに参加し、5人の研究者仲間と「日台関係強化のための6つの提言」という報告書をまとめました。その際、小生が一貫して強調したのは、台湾が中国の一部であろうとなかろうと、台湾の存在が日本の国益に密接にかかわっているということでした。中国が一党独裁の非民主主義国家である限り、中台が一体化し、南、東シナ海は大中華国家に扼されることになれ

ば、日本の海上輸送路に重大な問題が生じることは火を見るより明らかであり、それは日本にとって決して幸せなことではありません。

政治学者ブルース・ラセットの論を待つまでもなく、民主主義国家というのは、戦争を回避しようとする抑止力が働きますが、独裁国家は、民の命を盾にすることに無頓着であり、戦争を引き起こすことに躊躇しません。ですから、日本の周辺国に中国や北朝鮮のような独裁国家が存在することには警戒が必要です。日本はあくまで、守るべき目的が不明確である国連中心主義に幻想を持たず、国益確保の観点から東アジア、世界を見るべきです。

高橋先生は、これまでのお付き合いの中で、日本という国家の伝統を意識し、国家の尊厳を保ち、国益を守る、その上で日本の国の安全保障を構築していくべきだとの論を持たれる方と理解しておりましたが、あんのじょう台湾に関するわれわれの報告にも強い賛意を示してくださいました。その意味では、スタンスを同じくする小生が高橋先生の講義を引き継ぐことになったのは最高の幸せであり、喜びです。

振り返れば、先生と最初にどこでお会いしたかについては、記憶がありません。ですが、先生はもともと新聞記者でソ連・東欧の専門家。モスクワで特派員生活を経験された方ですし、私も中国・アジアをカバーエリアとし、同じ社会主義の中国で特派員生活を送った経験がある元通信社の記者です。どこか似通った境遇が2人を自然に接近させたという言い方をすれば、一級のジャーナリストである先生には失礼ですが、小生にはそう思えてならないのです。

香港駐在記者をしているときに、一度、先生がゼミ学生を連れてこられたことがあって、小生が香港返還や中国の事情について話す機会がありました。その席で、強く印象に残ったのは、学生たちが先生をすごく慕っているという点でした。

毎年、クリスマスに先生を囲む集まりが開かれ、このたびの退職時にはさらに盛大な記念パーティーが催されたのを見ても、慕われぶりが理解できます。その理由は、先生ご自身の個性的魅力ばかりでなく、日ごろから学生たちに物心両面で気配り、心配りしているからではないかと推察しております。

言うまでもなく、大学の教員には研究と教育という2つの使命があります。もちろん、高等教育機関である限り研究は大事ですが、大学への希望者全入時代を迎え、私立大学間で激しい学生獲得競争をする状況になった現在、少なからず発想を転換

しなくてはならないでしょう。僭越ながら、それは学生に4年間でどういう満足感を与えるかという視点、すなわち教育力をもっと重視する必要があるように思うのです。

教育力とは、単に講義の中身だけでなく、教師と学生との人間関係も含まれることとは言うまでもありません。小生も、千葉商科大学の末端で教育に携わる者として、先生のご意志を継いで、学生に慕われ、授業に満足してもらえる教師を目指したいと深く思っているところです。